埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

サバイバーの食卓『スイスのロビンソン』の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水間, 千恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/374

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

サバイバーの食卓
――『スイスのロビンソン』の場合――

水間千恵

はじめに
――『スイスのロビンソン』成立史と分析の対象――

『スイスのロビンソン』(*Der Schweizeriche Robinson*, 1812–27)は、ヨハンナ・シュピリ(Johanna Spyri, 1827–1901)の『ハイジ』(*Heidi*, 1880–81)とともに、スイスを代表する児童文学作品として名高い。夫婦と四人の息子から成るスイス人一家を主人公にしたこのロビンソン変形譚は、そもそも、ベルンの牧師J・D・ウィース(Johann David Wyss, 1743–1818)が自分の子どもたちに語り聞かせたもので、その手稿を整理して出版できる形にまとめたのは、次男J・R・ウィース(Johann Rudolf Wyss, 1782–1830)であった。一八一二年から一三年にかけて二巻本で出版されたこの初版はたちまち大人気となり、英語、フランス語、イタリア語などに翻訳されたが、実はその際、翻訳者たちが自由に内容を改変したり、エピソードを付け加えたりしていた。いっぽう、息子のウィースも、それらの翻訳(翻案)書を踏まえて、父の死後、一八二六〜二七年にかけて独自の続編を発表している。そして一九世紀末までには、正編の内容に息子の手になる続編の内容を組み込んだ一巻本が、ドイツ語圏で流通するようになっていったのである。正続編ともに、チューリッヒのオーレル・フュースリー社(Orell, Füssli & Co.)から出版されたドイツ語初版の表紙に記載されていたのは編者である息子の名前のみであったが、今日出版されている合本版では父親の名前が著者として表示されるのが一般的である。

日本でも明治時代に初めて紹介されて以降さまざまな翻訳書が出版されてきたこの作品は、戦後に相次いで創刊された子ども向けの文学全集への収録状況からみても、無人島を舞台にしたサバイバルストーリーとしては、ジャンルの始祖たる『ロビンソン・クルーソー』

（*Robinson Crusoe*, 1719）に次ぐ地位をもつ変形譚と言える。[1]「食」に関する記述に着目しながら日本で出版された子ども向けのロビンソン変形譚の歴史をたどる試みの一環として、この作品を取り上げる意味もここにある。とはいえ、前述のとおり複雑な成立史を持つ作品であるがゆえに、翻訳書の底本はさまざまで、内容にも違いが見られる。紙幅の都合上ここでは詳述を避けるが、ウィース親子による正続編の合本ドイツ語版の完訳や抄訳のみならず、冒険小説作家W・H・G・キングストン（William Henry Giles Kingston, 1814–80）による英訳本からの重訳、さらにはフランス語版をも参照した翻訳もあり、それぞれの内容に違いが見られる。[2] 本稿では、ドイツ語圏で最も広く認知されているオーレル・フュースリー社のリューロー（Dr. Franz Reuleaux）校訂版を底本とする翻訳書のうち、出版年が新しい学習研究社の小川超訳を使用する。

一、豊かなサバイバーの楽園生活

物語は嵐の描写で幕を開ける。六日にもわたって大波にもまれたのちに岩礁に乗りあげた船がメリメリと音を立てはじめ、船員たちが先を争うように救命ボートで逃げだそうとしている緊迫した場面である。混乱のなかで、夫婦と十六歳から九歳までの四人の息子（フリッツ、エルンスト、ジャック〈ヤーコプ〉、フランツ）からなるスイス人の一家が逃げ遅れて座礁した船に取り残されてしまうが、幸いにも船が沈没を免れたおかげで、彼らは、嵐が収まると近くに見えていた島へ上陸することになる。このとき一家が難破船から島へ持ち込もうとした品は以下の通りである。[3]

- 火薬一樽
- 鳥撃ち銃三丁と猟銃三丁
- ばら弾とふつう弾
- 鉛（持てるだけ）
- 小型ピストル二組
- 大型ピストル二、三丁
- 弾丸を作るのに必要な鋳型
- 猟用の袋五人分
- 干し肉と乾パン一箱ずつ
- 鉄なべ一個
- ケース入り釣りざお一式
- くぎ一樽分とハンマー、ペンチ、のこぎり、おの、ドリル
- テント用の帆布
- ニワトリ十羽

（オランダ・チーズとバター一樽ずつを海上で回収）

（解き放ったガチョウ、アヒル、ハトが勝手に上陸）

上陸途中で海上を漂流していた樽を回収したところ、なかに入っ

ていたのがチーズとバターだったという幸運に恵まれたとはいえ、そもそも彼らが最初に難破船から持ち出そうとした食料は「干し肉と乾パン一箱ずつ」のみである。そのいっぽうで、銃器類はもとより「猟用の袋」や「釣りざお一式」など、食料を現地調達するための道具を取り揃えている。特徴的なのは、「鉛」「弾丸を作るのに必要な鋳型」といった道具を現地生産するためのものを持ち込もうとしている点である。同様に、一家が意図的に島まで運んだのはニワトリ十羽のみだが、それ以外にも船で飼われていたガチョウ、アヒル、ハトを解き放つとそれぞれが勝手に島へたどりついたため、結局一家の無人島生活は「家禽農場」つきという恵まれた状況でスタートしているのである。さらに、上陸三日目には、生き残っていた動物たち（牛、ヤギ、ヒツジ、ブタ、ロバ）を難破船から連れてきたことで「家畜農場」も整う。なお、このとき追加の調理器具や食器、寝具や武器に加えて、食料（ハム、トウモロコシ、穀物）を運んでいるがいずれも少量である。またこののちに船の積み荷を島へ運んだ際も、「火薬、鉄、鉛、穀類、果樹、道具類」（九四頁）、「銅製の大釜、鉄板二、三枚、新品のタバコおろし（原注　かぎタバコを作るためのおろし金）各種、砥石二個、火薬一樽、それに、なによりもありがたい火打ち石の小樽」（九九頁）などのように、道具中心であり、食料自体は持ち込んでいない。

このようにスイス人一家は、元祖ロビンソンと同様に陸地近くで座礁した船から多くの物資を運び込んでいるが、そこに食べものが占める比率はかなり低い。にもかかわらず、一家は上陸当初から比較的豊かな食事を楽しんでいる。表は上陸から一週間分の彼らの食事内容をまとめたものだが、注目すべきは、上陸初日からスープを作っている点である。無人島上陸から九か月経っても煮炊き用の鍋がないためにスープを飲むことができないと嘆いていた元祖ロビンソンに比べると、上陸直後から温かい汁物を口にしているスイス人一家がいかに恵まれていたかがわかるだろう[4]。さらに、現地調達食材の多様さにも注目したい。肉一辺倒だった元祖ロビンソンとは異なり、彼らは、カキ、海ザリガニ[5]、サトウキビ、ヤシの実、魚（種類不明）、カメの卵、川ガニ、イチジク、フラミンゴとさまざまな食材を手にしており、これ以降も、海のもの・山のもの・川のものを万遍なく調達していくのである。つまり、『スイスのロビンソン』は物質的に豊かなサバイバーを描いた作品のひとつだが、その豊かさは持込物資よりもむしろ現地調達分に負うところが大きいのである。また、二八年間に及ぶ孤島生活の大半をたった一人で食人種の恐怖に脅えながら過ごした元祖ロビンソンとは異なり、家族揃って無人島に上陸したこの一家は、孤独に震えることも、外敵の脅威に脅えることもない。つまり精神的にも豊かなサバイバーなのである。

二、開拓移民物語としての変形譚

実際にストーリーをたどると、『スイスのロビンソン』は飢餓や

表　スイスのロビンソン一家の食事内容（最初の１週間分）

上陸初日　家族全員で船を作り難破船から島へ移動。
　持込食糧：干し肉１箱，乾パン１箱（オランダ・チーズ１樽，バター１樽）
　家　　禽：ニワトリ 10 羽（ガチョウ，アヒル，ハト）
〈最初の食事〉
　乾パン＋干し肉と水と塩で作ったスープ＋カキ

上陸２日目　父親と長男が探検に出かける。
〈朝食〉　ゆでた海ザリガニ
〈昼食〉　ヤシの実＋サトウキビ
〈夕食〉　魚の串焼き＋鵞鳥の丸焼き＋干し肉のスープ＋オランダ・チーズ＋ヤシの実

上陸３日目〜4 日目　父親と長男が難破船の荷物の回収作業を行う。
　持込食糧：ハム数種類，トウモロコシその他の穀物の小袋いくつか
　家　　畜：牝牛１頭，ヤギ２頭，ヒツジ雌６頭・雄１頭，雌ブタ１頭，ロバ１頭
〈朝食〉　乾パン＋バター
〈昼食・夕食・朝食・昼食〉　船の備蓄品（内容不明）
〈夕食〉　ハム＋チーズ＋ビスケット＋カメの卵とバターで作ったケーキ＋シャンパン

上陸５日目　父親と長男と次男が難破船の荷物の回収作業を行う。
〈朝食〉　乾パン入りミルクスープ
〈昼食〉　ゆでた川ガニ
〈夕食〉　内容不明

上陸６日目　家族全員で引っ越し作業を行う。
〈朝食・昼食・夕食〉　内容不明。間食としてイチジク

上陸７日目　家族全員で海岸に打ち上げられた荷物の回収作業と樹上の家の整備を行う。
〈朝食・昼食〉　内容不明
〈夕食〉　フラミンゴの蒸焼き

　　は現地調達したもの

欠乏とは無縁なままに発見と獲得に明け暮れるサバイバーを描いており、この意味で楽園物語だとも言える。とはいえ、主人公たちは豊かな島の恵みに依存しきって能天気に楽園生活を満喫したわけではない。彼らは並外れて勤勉な労働者でもあり、自ら額に汗して働くことによって豊かな生活を築き上げていったのである。実は、その勤労意欲は島に上陸する前からすでに提示されていた。幼い子どもや女性が含まれていたため、元祖ロビンソンのように難破船から島まで泳ぐという原始的な上陸手段を使えなかったため、彼らはまず船を作らねばならなかったのである。資材にも人手にも制約があるなかで、桶船という三男の提案が採用されることになる。まず空き樽を半分に切って八個の桶を用意し、これを二列につなぎ合わせ

てから安定性を保つためのさまざまな工夫を施して完成させるのだが、その構造について、父親は、「カタマラン」の名で知られるポリネシアの双胴船にヒントを得たものだと明かしている。物語の冒頭（九〜一二頁）に置かれたこのエピソードは、物作りの過程を詳細に描写しながら、豊かな知識と実用的な技術をもつ父親像を読者に印象づけており、この作品の基本的性格を示すことに成功している。また、子どもの伸びやかな発想力を尊重し、それを活かした物作りを実践している点からは、物語に通底する家族観あるいは教育観も読み取れるだろう。

このように難破船上での上陸船作りから始まった物語は、こののちも、勤勉に働き続けることで豊かさを増幅させていくスイス人一家の様子を克明に記録する。「食」に関して言えば、最もわかりやすいのは農場だろう。彼らは、島の恵みをただ享受するのではなく、自らの力で立派な農場を作り上げているのである。難破船から連れてきた家禽や家畜の世話はもちろんだが、それ以外にも土地を耕し、現地で見つけた果樹根菜（マニオク、ジャガイモ、パイナップル、イチジク）に加えて、船から苗や種を持ちだした野菜（カボチャ、メロン、レタス、サラダ菜、キャベツなど）、果樹（ナシ、リンゴ、ダイダイ、ハタンキョウ、モモ、アンズ、クリ、ブドウなど）、豆類（エンドウ、インゲン、ソラ豆、ナタ豆など）、穀類（大麦、小麦、ライ麦、カラス麦、トウモロコシ、キビなど）を育てている。努力の結果、二年もしないうちに、住まいのそばの菜園には「葉野菜だけでなく、キュウリやメロン、とびきり大粒のトウモロコシまである」（一六九頁）うえに、サトウキビやパイナップルが根を下ろし、少し離れた場所に作った穀物畑や豆畑でも順調な収穫を得られるまでになっている。

こうしてみると、『スイスのロビンソン』は、一家族が未知の土地で力を合わせて働くことによって新しい生活を打ちたてていく様子を描いているという意味で、まさに開拓移民の物語だと言える。物語のなかでは、主人公たちの出自についてはスイス人であるということしか説明されておらず、彼らがたどりついた島の位置についても具体的には述べられていない。[6] 但し、難破船には「ヨーロッパの移民が遠い世界のはてで生きていくのに必要なものが、ほとんど無限に準備して」（九四頁）あり、一家の父親は「島の原住民が、いつかわれわれを発見するということが、おおいにありうる」（一九五頁）と考えてマレー語の勉強を始めている。つまり、詳細はわからないものの、少なくとも彼らは、移民用物資を積んだ船に乗って航海している途中で難破し、マレー語文化圏のどこかで暮らしはじめたと考えられる。いずれにせよ、生まれ故郷を遠く離れた場所へやってきて、家族で力を合わせて未開の地を切り開き豊かな生活を築いた彼らは、開拓移民の成功例と言えるだろう。

このように、父母と子どもで構成された家族による新天地開発物語であるという点で、『スイスのロビンソン』には、開拓期のアメリカを舞台にしたローラ・インガルス・ワイルダー（Laura

Ingalls Wilder, 1867–1957）の自伝的小説『大きな森の小さな家』（*Little House in the Big Woods*, 1932）に始まる「小さな家」シリーズにも似た魅力を見出せるだろう。難破船から持ち出した物資をもとにして無人島で大農園を作り上げたスイス人一家の物語と、全財産を幌馬車に積み込んで未開の西部へと乗りだし、大自然の脅威と闘いながら、家族で力を合わせて新生活を築いた開拓民インガルス一家の物語は、舞台こそまったく異なるが、本質部分で相通じるところがある。

だがそのいっぽうで、『スイスのロビンソン』の後半部分は、猛獣退治や野獣の調教などに代表されるような華々しい活劇が中心を占めており、この点では、一九世紀の少年向け冒険小説の特長を前面に打ち出している。また、孤島上陸から十年後に設定された結末では、新たに漂着したイギリス娘と二〇代半ばの青年になった長男とのロマンスが描かれ、この長男と四男が真珠や珊瑚や香料をもってヨーロッパに戻ることになっているため、主人公一家は「新世界で築いた財産や美女という褒美を手にして帰国する冒険家」という役割をも果たすことになる。しかも、最後に一家の父親がイギリス保護領としての「新スイス国」の樹立を宣言するのであるから、全体としては植民地建設の物語になっていることは否めない。とはいえ、この後半部分は一八二六〜二七年に出版された続編部分に含まれる内容であり、正編自体は一家が孤島生活を軌道にのせるまでの二年分ほどの記述で終わっていたのである。つまり、そもそも一家族の開拓物語であったものが、英仏の翻訳者たちの手を経たのちに植民地主義的色彩を強めたという指摘も可能だろう。この点については本稿の目的を逸脱するため詳細は別稿に委ねることとして、とりあえずここでは、続編部分を含めて考えたとしても『スイスのロビンソン』が家族の物語としての性質を強く打ち出していることを指摘するにとどめたい。[7] すなわち、この物語の入植者たちは自分たちだけの力で開拓を成し遂げ、その地への定住を決意しているという点である。原住民を捕まえて主従関係を構築し、最終的には不在地主となる元祖ロビンソンとは、この点で大きく異なっているのである。

三、どこにもない島での野外キャンプ

『スイスのロビンソン』の主人公一家は、上陸直後から、不運を嘆くことも不安を口にすることも一切なく、父親の指揮監督のもとで整然と働く。上陸後、彼らがまず取り組んだのは、寝場所の確保だったが、難破船から持ってきた帆布と帆桁を使ってテントを建てるいっぽうで、敷物にするためのコケや草を集めて日に干すなど、段取りの良さが際立っている。寝場所が整うと今度はすぐに食事の準備にとりかかる。これも非常に手際よく、川のほとりに石を積んでかまどを作り、火を燃えたたせている。島での最初の食事は、川の水と、難破船から運んできた干し肉と、次男が見つけた天然塩で

作ったスープに乾パンをそえたものである。このように、テント設営、かまど作り、食事準備といった作業を効率的にこなしていく様子は、まるで手なれたキャンパーのようである。さすがに物不足はいなめず、スープはできても銘々皿がないため、直接鍋にスプーンを突っ込むはめに陥っているが、それがまたいかにも野外活動らしさを演出する。唯一いかにも難破者らしいのは、スプーンすらもなかったために貝殻を代用した点ぐらいであろうか。いずれにせよ、燃え盛る火を囲んで温かい食事を楽しむその様子は、無人島でのサバイバルというよりはキャンプを思わせる。たとえば次の一節は上陸わずか二日目の夕食の様子である。

火を中に、一方の側には二又の木を二箇所地面に打ちこんで、ずらりと魚をさした木の焼きぐしがそれに渡してあり、反対側では、一羽のガチョウが焼けていて、大きな貝殻の受けざらにぽたぽたあぶらがしたたっている。火の上には、鉄なべがかかって、こい肉スープのいいにおいがたちのぼっている。また、すこしはなれたところに、きのう引きあげた樽の一つが、横たおしになっているが、見るとふたがあいていて、極上のオランダ・チーズと思われる、きっちり鉛のはくに包んだものが見える。（三四〜三五頁）

音を立てながら焼ける肉や魚が目に浮かび、いい香りが漂ってきそうな光景である。この二日後（上陸四日目）の食事風景も見てみよう。この日は、次男が海岸の砂のなかから見つけてきたカメの卵と、樽から出てきたバターと現地調達したカメの卵を使った料理が目玉であり、父親と長男が難破船から回収したハムやお酒も加わっている。

卵料理をおえたお母さんの声が呼んだ。いまはさらもスプーンも、フォークその他の食器類もきちんとそろい、倍のよろこびで食事の席についた。バターの樽のまわりに立つものもいれば、のんびり地面に腰をおろすものもいた。ハムにチーズにビスケット、そのうえ卵ときては豪華版というほかはない（中略）食事がおわるとフリッツに、船長室から失敬してきたシャンパンを一本出させた。（四八〜四九頁）

船から食器類を持ち帰ったおかげで、食事の様子がますますキャンプめいてきていることがわかる。すっかりリラックスし祝祭的な雰囲気すら漂うこの食事風景に、遭難者らしい緊迫感はまったくない。このように、上陸当初から食事がまるで野外キャンプのように描かれている点が、『スイスのロビンソン』という作品の第一の特徴である。

さらにもうひとつ、この作品に独自色を与えているのが、寄せ鍋を思わせるような島の性格である。食べものとの関連でいえば、一

家が作り上げた大農園にその特徴がよく表れている。現地調達した南国の植物と、船で運ばれてきたヨーロッパ産の植物が混在する彼らの畑は、島の豊饒さを示すものではあるが、その反面、この世に実在するとは思えない奇妙なごった煮空間になっているのである。熱帯植物のパイナップルやサトウキビの隣で、寒冷なヨーロッパから持ち込んだ大麦や小麦が茂りに茂ったというくだりを読めば、植生分布に関する知識に乏しい者でも首をかしげたくなることだろう。特別な技術も工夫もなしに、暑さには決して強くないはずのレタス、サラダ菜、キャベツなどの葉野菜がどんどん育つというのも不可解である。さらには、ニシン、チョウザメ、サケを何樽もの塩漬けや油漬けにして保存したというエピソードまであるため、こういう魚が熱帯の島に果たして大群でおしよせるものなのかと考えはじめると、物語の信憑性はいっそう低下する。

さらに奇妙なのは動物である。サル、ジャッカル、ロバ、水牛、大蛇はまだよいとしても、フラミンゴ、カピバラ、ダチョウ、アザラシ、トド、セイウチ、カバ、ゾウ、ライオン、トラまでもが登場するにいたっては、マレー群島近海に限らず太平洋全域に範囲を広げても、舞台となる島が見つかるとは思えない。そもそも、次男が捕まえた野ブタを「ギアナと、アメリカ全土にいる」ペッカリ（ヘソイノシシ）だとしながら（二二五頁）、三男が大格闘のすえに仕留めた獣は「アフリカイノシシ」だとする（三〇二～三〇五頁）など、テキスト自体も混乱を極めているのである。この作品の自然科学に関する知識に不備があることは、編者たるヨハン・ルドルフ・ウィース自身も認めるところであった[8]。そこへさらに翻訳者たちが自由に加筆し、ヨハン・ルドルフがそれを参照しながら続編を書いたのであるから、物語に辻褄の合わない部分が生じたのも無理からぬことなのかもしれない。

しかし、逆に、この破綻した舞台設定こそが、「子どもの本」としての面白さの源泉になっていることも否定できまい。そもそも、自然科学に関する知識が少ない子どもの読者は、大人ほど細部のリアルさに拘泥しない。それよりもむしろ、珍しい植物や動物が次々に登場することに興味をかきたてられ、起伏にとんだストーリーに興奮するだろう。この意味で、荒唐無稽な設定によって生み出されたその夢のような冒険空間は、子どもの読者が持つ柔軟な心に合致したものだとも言える。現実世界にはありえない島（＝どこにもない島）が、子どもにとって最上の冒険の舞台となりうることは、J・M・バリ（James Matthew Barrie, 1860–1937）も実証している。子どもが永遠に子どものままでいられる「ネヴァーランド」は、フラミンゴが空を飛び、ダチョウが踊り、猛獣たちが闊歩する夢の島である。その設定を吟味すれば、一見まったく無関係なリアリズム風のサバイバル物語と永遠の少年を主人公とする冒険ファンタジーとの間にも、新たなつながりが見えてくることになるだろう[9]。

四、教材としての「食」

「どこにもない島」で、スイス人一家が最初に口にした現地の食べものはカキである。岩やほかの貝殻などに着生して成長するこの二枚貝は、浅瀬で生息しているためもあってか、変形譚では上陸直後のサバイバーや道具を持たないサバイバーの力強い味方として頻出している。『スイスのロビンソン』に先んじてドイツ語圏で定着していたカンペ（Joachim Heinrich Campe, 1746–1818）の『新ロビンソン物語』（*Robinson der Jungere*, 1779）、一九世紀イギリスを代表する冒険小説作家のひとりR・M・バランタイン（Robert Michael Ballantyne, 1825–1901）の『さんご島の三少年』（*The Coral Island*, 1858）、SFの父とも呼ばれるジュール・ヴェルヌ（Jules Verne, 1828–1905）の『神秘の島』（*L'île mystérieuse*, 1874）など、例を挙げればきりがない。このようにカキが変形譚のサバイバーたちにとっていわば「常食」のように描かれてきたのは、特別な技術や道具がなくとも安全に比較的たやすく採集できることに加えて、それが「食べられるもの」として広く認知されていたということ、つまりは日常生活において身近な食材だったからに他ならない。実際、ヨーロッパにおける食材としてのカキの歴史はたいそう古く、先史時代の遺跡からもその殻が発見されており、養殖は古代ローマ時代から行なわれていた。一七世紀〜一八世紀のロンドンでは紳士たちの食卓にしばしば並び、フランス皇帝ナポレオン一世の好物としても知られる。[10]

『スイスのロビンソン』でも、カキは上陸直後の最初の食事に登場しているが、その扱われ方には特色がある。原著者ウィース親子が内陸国スイスの人であったこととも関係するのか、主人公一家はカキの実物を見たことがなく、生まれて初めて食べるという設定になっているのである。そもそも彼らはこれを食べるために採ったわけでもない。スープを飲むために殻をスプーン代わりにしようと次男と三男が海岸で採ってきた貝を見て、博識な父親がカキだと気づき食べることになったのである。物語では、初めて手にした食材を扱いかねて四苦八苦する子どもの様子がユーモラスに描写されている。

> （前略）ジャックはしきりにナイフを使って、カキのふたをこじあけようとしていた。しかし、どんなにしかめっつらをし、どんなに力を入れても、あけることができなかった。――わたしは笑って、そのままカキを赤い炭火の上に置かせた。するとまもなく、つぎつぎにふたはあいた。
>
> 「さあ、できた。通のよろこびそうなごちそうだぞ。ひとつ、味をみようか。おいしいぞ」。（一九〜二〇頁）

子どもたちに手本を示す意図もあって最初にカキを口にした父親

だったが、肝心の味については「おいしいまずいは人によってちがうから、とやかくいわないが、自分の分はしかたがないから食べる」（二〇頁）と歯切れが悪い。子どもたちはもっと率直である。「そのいやらしい形」にぞっとしながらも、勇気を出して「薬をのむように、えいと飲みこんで身ぶるい」したのちに、「カキほどいやな料理はない」と結論づけているのである（二〇頁）。カキをこれほど否定的に描いた変形譚は他にない。だがそもそも万人受けする食べものではなく、とりわけ子どもにとっては必ずしもおいしく感じられるものではないことを思えば、その形容はかえって子どもの読者の共感をそそることだろう。

カキをめぐるこの滑稽なエピソードは別の意味でも重要である。自然を舞台にした教育物語としての『スイスのロビンソン』の本質を端的に示しているからである。右の引用部分でのカキは、子どもたちが新しい知識を身につけるための「教材」になっている。同様に、長男が見慣れない鳥の巣のようなものを発見したときにも、父親は、それがヤシの実であることを教え、のちにサルを使って樹上高いところにある実を手に入れる方法を実演してみせている。興味深いのはサトウキビについてのエピソードである。これに最初に気づいた父親は、そのことを直接教えるのではなく、「自分で発見するよろこびを残しておこう」（二八頁）との思いから、息子が自ら発見するように仕向けている。しかも、息子が自分で発見したサトウキビに興奮し、その味に夢中になって我を忘れていると見て取るや、「酒のみ」を引き合いに出して耽溺を戒めることも忘れない。また、末っ子が見つけた果実を勝手に口にした折には危険性を指摘するのみならず、家族を呼び集めて未知の土地での可食植物の見分け方を伝授している。これらの点からわかるのは、『スイスのロビンソン』では食べものが教材として機能していること、しかもそれが単なる自然科学の知識にとどまらず、実践的なサバイバル技術はもちろんのこと道徳観にまで及ぶ幅広い教育で使われているということである。

一九世紀の変形譚では、無人島はしばしば自然科学の知識を学ぶための場となる。たとえば先に挙げたバランタインやヴェルヌの作品はその好例である。また、元祖ロビンソンの物語以来、無人島が道徳的な修練の場となるのも珍しい設定ではない。『スイスのロビンソン』は両方の性質を備えているが、父親によって披露される自然科学の知識は「教養としての知」ではなく、未知の土地で生き延びることを目的に据えた実践的な内容であり、そのような知識を活かすための勤勉さ、自制心、協調性といった徳の重要性が同時に強調されることが特徴と言える。そして両者をつなぐための小道具として巧みに使われているのが食べものなのである。

物語の冒頭で、語り手たる父親は四人の息子の性格を「あわてもので、気のよい」「頭はいいが、すこし考えすぎのところがあり、動きがにぶい」「のんきものながら、よく手伝いもし、なかなかやる気のある」「素質はよさそうだが、まだ十歳にもならず、考えが

はっきりしない」とそれぞれに分析している（一三頁）。そのような個性を尊重しつつ自然を教材にして子どもたちを教育した父親は、十年後に「ワルツもおどれず、しゃれたおじぎもできず、社交的な口のききたかも知らない。（中略）男ざかりの小気味よい活発さと、なおまぎれない少年期のなごり、それがかれらのすべてである」（二八八頁）と謙遜しながらも、健康と体力と野性味とがんこさを備えた若者へと成長した息子たちの姿を誇らしげに披露している。『スイスのロビンソン』は、未知の世界を舞台にした冒険物語であると同時に、大自然のなかで子育てをする父親の物語でもあるのだ。「食」に関する記述に着目して物語を読むとそのことがよくわかる。

五、消された女性サバイバー

活躍する父親に比べて、この作品では母親の影が非常に薄い。上陸直後に父親が「料理は、もちろんお母さんに一任する」（一六頁）と宣言していることから、食事の世話は一手に引き受けていたはずなのだが、彼女がどんな料理を作っていたのかという点については具体的に説明されていない。食卓の全貌が詳細に記されるのは、先に引用した上陸直後のピクニック風の食事ぐらいで、その後は、基本的に食材が示されるだけなのである。その食材を「ゆでた」「焼いた」というように、調理法に関する情報が付加されることもあるが、これも物語が進めば進むほど減っていくことになる。戸外で活動する夫や息子たちを、母親が「ごちそう」を作って迎えたという記述は全編を通して登場するものの、そのごちそうが何だったのかという点についてはほとんど明かされない。たとえば、物語の終盤で新たな漂着者ジェニー・モントローズが一家に加わったときの様子を例にとってみよう。母親は「大乗り気で、とっておきのごちそう作りにとりかかった」（三一八頁）はずなのだが、宴会料理の食卓は「ピスタチオ、干しブドウ、ハタンキョウ、サトウ、カッサバのケーキももりだくさん」（三一八頁）としか説明されていない。「カッサバ（マニオク）のケーキ」というのはお菓子ではなく平たいパンのことであり、そのほかは食材名ばかりのため、彼女がどんな料理を作ったのかについては、ここでもまったくわからないのである。

さまざまな食べものが次々と登場し、食事の場面も頻出する『スイスのロビンソン』は、数ある変形譚のなかでも「食」に関する記述が最も楽しい物語であることは間違いない。だが、こうして改めて細部を確認してみると、そのような楽しさとは、実は、料理の素晴らしさという意味での食卓の豊かさとは無縁だったことがわかる。つまり、「食」に関するこの作品の魅力は、食材の豊かさや「食」をめぐって家族の間で交わされる明るいやりとりに起因するものだと言えるだろう。しかも、そのような明るい雰囲気の中心にいるのは、母親ではなく父親なのである。このことは、「カッサバのケーキ（＝マニオクのパン）」を初めて作ったときの描写（一〇二～一

〇五頁）からもよくわかる。タバコおろし器を使ってすりおろしたマニオクを、帆布で作った袋につめこんで絞りあげて水分を切り、残った粉状のものを固めて焼くという一連の過程が、家族の楽しい共同作業として多くの会話を交えながら詳細に描かれているのだが、この作業を取り仕切っているのは母親ではなく父親なのである。その役割は、鉄板にパン種を広げて焼くという「調理」の最終段階でも変わらない。

わたしはみんなをまわりに立たせて、焼きかたの手本を見せた。（中略）焼き手のほうも、焼きながらはなはだひんぱんに味見をし、つまみ食い、指をなめ、いっこうにできあがりのたまる気配がない。そればかりか、なかには申し分なくきれいなお手々で焼くものもいて、そういう製品は本人に食べてもらうほかはない。さて、その食べるほうは、大きなミルクの鉢がはこばれて、すぐはじまった。（一〇五頁）

この場面の描写は、パン（ケーキ）作りに夢中になっている子どもたちのほほえましい様子を伝えるのみならず、そんな息子たちを見守る愛情に満ちた父親の視線を可視化しており、「イクメン物語」としてのこの作品の一面を明らかにする。他方、本来の「調理責任者」は、すりおろしたマニオクを入れて水分を絞るための袋を縫っただけで、パン（ケーキ）作りには一切かかわっていないのである。バター作り（一二四頁）やニシンの塩漬け（一六六～六七頁）などの作業でも同じことが繰り返される。

このように、調理責任者であるはずの母親は、そもそも仕事の内容はもとより成果も披露してもらえないうえに、しばしばその役割まで夫に奪われてしまっているのである。その結果、探検や猟に出かけることのない母親の存在感が、物語のなかで薄くなるのは当然のことと言えよう。

ロビンソン変形譚の研究者として知られるマーティン・グリーンは、彼女について、「影の薄い小心な存在で、『か弱いお母さん』として言及され（また呼びかけられ）、たいていの冒険的企ての足手まといである」[11]と述べている。彼はまた別の著書でも、男性の成功を称えたり失敗を慰めたりするのがせいぜいの自主性のない女性の代表例として彼女のことを引き合いに出している[12]。だが、グリーンには、物語における母親の重要な役割を見落としていた節がある。彼女は、夫から任命された調理責任者であっただけでなく、自主的に畑作りを行うことで、食料調達に関して男たちに負けない貢献をしていたのである。葉野菜から穀類まで揃った大農園は、もとはといえば、彼女が難破船を脱出する際に家族には内緒で持ってきた種や実を撒いて作りはじめたものだったのである。夫が船から持ち出してきてそのまま放置していた果樹の苗木が枯れないように世話をしていたのも彼女である。サバイバル生活が始まったばかりのころ、彼女は、夫や年長の息子たちがあちこち出かけている間に、末っ子

の手を借りながら、ほとんど一人で畑仕事をこなしていた。つまり、この物語における母親の真価は、料理よりもむしろ食料調達の面で発揮されているとみなすべきなのである。

このように、「食」に関する一家の活動を詳細に見れば、母親のことを足手まといにしかならないか弱い女性と評したグリーンの意見には、大きな穴があったことに気づかされるだろう。彼女は華々しい冒険こそしないものの、畑の開墾という重労働に従事し、家族に豊かな食卓を提供しているのであって、まさに開拓移民としての強さを十分に持った女性だったと言える。実際、夫が不在の折には銃を握りさえしている。さらに、大蛇が出てきたときには「アマゾンの女兵士」のように勇敢に引き金を引いている[13]（二〇六頁）。つまり、必要とあらば銃を持って戦える女性であり、未開の地で生き延びていくための気概と能力を持った人物だといえる。

彼女と同じように不当な扱いを受けているのが、物語に登場するもう一人の女性ジェニー・モントローズである。物語の終盤で一家に加わるこのイギリス人少女については、野性的な若者へと成長した長男とのロマンスが設定されているため、「救われ、守られ、故国へ送り届けられる」か弱き女性のような印象ばかりが強く残る。だが、実のところ、彼女はほとんど身一つで島に流れ着き、二年半にも亘って一人きりで生き延びてきた「女性ロビンソン」なのである。わずか一本のナイフだけを頼りに、現地調達したものを使って衣類や世帯道具を整え、食料確保の手段として鵜を飼いならすことまでやってのけた彼女のサバイバル能力は並みのものではない。軍人の娘としてインドで生まれ育ったという設定も、彼女が外地で生きるうえでの知恵と技術を備えていたことを示すためのものであろう。だがそんな彼女の波乱に満ちた生い立ちや二年半に及ぶサバイバル生活は、長男フランツによってその価値を消されてしまう。彼は、わずか五日間の「ジェニー救出の旅」について、延々と自らの冒険談を家族に語り聞かせたのち（三二三～三二頁）、それよりも遥かに長く困難を極めたはずのジェニーの経験について、「小さいときからインドにきて暮らし、ヨーロッパへ帰ることになって、途中で難船し、命びろいをして、『煙の立つ岩』でロビンソン＝クルーソーの生活をした」（三三二）と無情なほどに省略した形で伝達するのである。しかも「それをお父さんに書いてもらったら、ぜったいおもしろい本になりますよ」（三三二頁）と父親に勧めることによって、ジェニー自身が語り手になる可能性をも前もって消去している。このように、豊かなサバイバル能力を封印されてフランツの「可愛い恋人」としての仮面をつけられたジェニーは、いざとなればアマゾネスのように戦えるにもかかわらず「か弱いお母さん」と呼ばれ続ける一家の母親と同様に、男性たちの手で消されてしまったサバイバーだと言えよう。

おわりに――まとめと今後の課題――

物質的にも精神的にも豊かなサバイバーを描いた『スイスのロビンソン』は、サバイバル冒険譚としての体裁を整えてはいるが、その実体は、ユートピア小説だと言える。とはいえ主人公の一家は、島の恵みを一方的に享受して飽きる前に帰国する「一時滞在・観光型のサバイバー」ではなく、額に汗して働いて自らユートピアを築いていく「開拓移民型サバイバー」なのである。この物語は、主人公が労働を通じて無の状態から豊かさを生みだしていくことと、その結果生じる満足感や幸福感が重要な魅力のひとつになっているが、これはデフォーの『ロビンソン・クルーソー』にも共通する。衣住食を整えていくさまが詳細に描写されるということ、つまりは物作りのプロセスが描かれるという点で、それは生活感に根差した魅力でもある。この意味で、『ロビンソン・クルーソー』や『スイスのロビンソン』に代表されるような初期の変形譚には、家庭小説にもつながるような魅力があったと言えるだろう。とりわけ、一家族が力を合わせてユートピアを築いていく様子を詳細に語った『スイスのロビンソン』の場合は、その性質が色濃く表れている。食べものにまつわるエピソードは、親子の楽しげな会話によって構成され、理想的な家族関係を提示する場となっている。食料調達から調理の様子や食卓の雰囲気まで、物語に頻出する「食」にかかわる記述には、つねに家族の幸福感が盛り込まれており、作品全体の印象をも決定づけているのである。

家族物語としての性質を備えた『スイスのロビンソン』であるが、その特徴は、家庭の中心を父親が占め、家事を含む生活指導全般において父親が直接子どもの教育にあたる「イクメン物語」になっている点にある。当時の教育観や作品成立の経緯を考えれば、少年（息子）を成人男性（父親）が教育するという設定は当然であるにせよ、日本での受容状況を考察する際には一つの論点となろう。また、父親とは対照的に存在感が薄い母親については、開拓移民として彼女が発揮している力に注目する必要がある。スイス人一家以上に過酷な条件下で生き抜きながらその声を封じられている少女サバイバーについても同様である。故国から遠く離れた地で生き延びる知恵と技術を持ちながら、そのことを消去されてしまった女性たちは彼女たちだけではあるまい。伝統的に、女性登場人物が活躍しない物語類型として知られてきたロビンソン変形譚であるが、このような観点から物語を読み直せば、変形譚というジャンル自体についても新たな一面が見えてくるはずである。この点については別稿にて論じることとしたい。

そもそも変形譚は植民地主義と強く結びついた文学ジャンルであるため、開拓移民の物語としての性質を強く打ち出した『スイスのロビンソン』にヨーロッパ諸国の領土的野心の反映を読み取るのはあながち的外れとはいえない。しかし、この作品は、無人の地で家

族だけの労働によって楽園を建設していくさまを描いた前半と、探検や猛獣との戦いに主眼を置いた後半とでは、物語の性質に違いが見受けられる。その背景にあるのは複雑な生成史である。つまり、ドイツ語原著正編の段階では家族物語だったものが、英米の翻訳者たちの改作を踏まえた続編では、未開の地を開拓して領土とし美女と財宝を手に故国に戻る英雄物語としての性質が付け加わったのである。作品全体の性質を論じる際には、このような生成史とからめた考察が必要不可欠であろう。これと並行して、日本語版の底本の選択や訳者による改変について詳細な調査を行えば、日本でのこの作品の受容をめぐるさまざまな力学がより明確になるだろう。今後の研究が待たれる部分である。

註

（1）東京創元社の世界少年少女文学全集（一九五四～五六年）、講談社の少年少女世界文学全集（一九五七～六二年）、小学館の少年少女世界名作文学全集（一九六一～六五年）、いずれにも収録されている。

（2）ちなみに、文学全集収録作品については、創元社版は独語版と英仏の翻訳を参照した編訳、講談社版はリューロー校訂版の抄訳、小学館版がキングストンの英訳をもとにした抄訳である。

（3）但し、多すぎて積み残しが出たという記述があるためすべてを持ち込めたわけではないものと考えられる。

（4）デフォー、『ロビンソン・クルーソー』、一二〇頁。なおロビンソンの「食」については、拙稿「サバイバーの食卓――『ロビンソン・クルーソー』の場合」、『川口短期大学紀要』第二十六号、二〇一二年一二月、一～一五頁において詳述した。

（5）ドイツ語原著の原文ではMeerkrebsとなっているので、ロブスターの一種だと考えればよい。

（6）但し、版によってはさらなる情報が書き込まれている場合もある。たとえば一八一六年に出版された英訳本には、父親が一七九八年の革命で財産を失ったためイギリスに渡って宣教師になり、家族でタヒチに向かう途中で船が難破した、と一家の来歴が細かく披露されている。また、島についても、「ジャワの南西、パプア・ニューギニア近くの孤島」とおおよその位置が特定されている（Johann Wyss, *The Swiss Family Robinson, First published in 1816 as THE FAMILY ROBINSON CRUSOE: OR, JOURNAL OF A FATHER SHIPWRECKED, WITH HIS WIFE AND CHILDREN ON AN UNINHABITED ISLAND*, London: Penguin, 2007, p. 7）。

（7）テキスト生成史については、M・グリーン『ロビンソン・クルーソー物語』、岩男龍太郎訳、みすず書房、一九九三年、七六頁および Harvey Darton, *Children's Books in England: Five Centuries of Social Life*, London: Cambridge UP, 1932, 116-17 でその一端が紹介されており、各種英訳版の内容の変遷については Phillip Holden, "A Textual History of J. R. Wyss's *The Swiss Family Robinson*," MA Thesis presented to the University of Florida, 1986 も参考になるが、いずれにおいてもドイツ語原著（正・続編）とそのもとになった Johann David Wyss の手稿および英仏訳の関係についての詳細な記述はなされていない。

（8）正編初版の前書で言及している（J. R. Wyss, "Vorrede," *Der Schweizerische Robinson*, Zürich: Orell Füsuli, 1812, p. iii-xi）。

（9）ロビンソン変形譚としての『ピーター・パン』分析については、グリーン、前掲書、二一六～三四頁、岩男龍太郎『ロビンソン変形譚小史』、みすず書房、二〇〇〇年、一四〇～四七頁、拙著『女になった海賊と大人にならない子どもたち――ロビンソン変形譚のゆくえ』、

玉川大学出版部、二〇〇九年、一五七〜二二六頁等ですでに論じられている。

(10) ちなみに、『ロビンソン・クルーソー』にカキは登場しない。ほとんど身一つで無人島に漂着した主人公はこれを探す素振りさえみせていないことは、元祖ロビンソンの奇妙かつ不自然な食糧調達活動の一例に加えてよい。

(11) グリーン、前掲書、九三頁。

(12) Martin Green, *Seven Types of Adventure Tale: An Etiology of a Major Genre*, University Park, PE: Pennsylvania State UP, 1991, p. 58.

(13) 版によっては、母親が銃を撃つ場面がないものもある。グリーンが参照したキングストンによる英訳版もそのひとつ。

〔使用テキスト〕
ウィース、ヨハン＝ダビット、『スイスのロビンソン』、小川超訳、学習研究社、一九七六年
ヴェルヌ、ジュール、『神秘の島』第一部〜第三部、大友徳明訳、偕成社文庫、二〇〇四年
カンペ、ヨハヒム・ハインリヒ、『新ロビンソン物語』、田尻三千夫訳、鳥影社ロゴス企画、二〇〇六年
デフォー、『ロビンソン・クルーソー』、海保眞夫訳、岩波少年文庫、二〇〇四年
バランタイン、『さんご島の三少年』、大泉一郎訳、講談社、一九六〇年
バリ、J・M、『ピーター・パン』、厨川圭子訳、岩波少年文庫、二〇〇〇年
ワイルダー、ローラ・インガルス、『大きな森の小さな家』、こだまともこ・渡辺南都子訳、講談社文庫、一九八八年

（提出日　二〇一三年九月二五日）